

家事の習慣 自分のために



「カジメン」男子高校生、塾開講

「共働きだから、男性も家事をする」。そんな考え方は、もう古いのかもしれない。若い世代の中には、ライフスタイルや家庭内の立場に関係なく、家事をするのが当然と考える男子「カジメン」が育ってきているようです。

3月の放課後、東京都内の一軒家で、10代の男子小中高生たちが普段とだけ家事をやっているか話を合っていた。

「脱いだ服を洗濯機に入れてる？ 食事後に自分の食器を下げるのは？ ほぼ毎日やってたら〇、週2回以下なら×を付けてね」

問いかけたのは、高校2年の桑井龍三さん(17)。昨年11月に家事を学ぶ「桑井塾」を立ち上げ、これまでに小中学生や同年代に向けて10回開いた。自宅開催のこの日は、東京、埼玉に住む7人が参加した。

依存・貢献度知る

質問は「家族への依存度」のチェックが目的だ。桑井さんが「中学3年なら

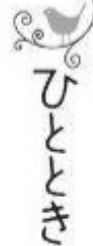
持つ優子さん。「お手伝いをして感謝されることで、自己肯定感や他者への思いやりが育つ」と感じ、3人の子にも3歳ごろから家事を頼むようになった。

周囲の助けにも

一方、小学生のころには掃除や洗濯物畳みが日課になっていた桑井さんは、「一秒でも早く終わるよう工夫するようになった」。掃除の手順を考えたり、1回の手の動作で服を畳む方法を習得したり。「効率的にタスクをこなすための思考力は勉強にも役立った。無意識に他の人のために動けるようになった」

高校の家庭科の授業で、クラスの約半数が「洗濯機」のボタンを押したことがない「1」に手を挙げたのに驚いた桑井さん。家事は自分の成長につながると知らせたいと、塾を立ち上げた。

西原快さん(15)は塾参加後、居間が汚れていると自ら掃除機をかけるように。「他人任せでなく、自分でやることを探すように」



「料理教えて！」と、一人暮らしを始めて8年になる娘が言った。たまに実家に戻ってきた時、「材料もそろっているから一緒に作ってみない？」と誘っても、「面倒くさい」と空振りばかりだったのに、心境の変化に驚いた。

思えば自分の独身時代、ギリギリまで寝ていて朝食は抜き、何となく好きなものを食べていて、「愛情を込めて作る」という世界からはほど遠かった。

ところが、家庭を持ち、子どもができる、何をどれだけとったかが分かる手作り料理に目覚めた。

「母親の真紀子さん(46)は、「子どもの世話を全部やらなきゃ」とがんばっていたけど、将来自分の力で歩けるように促すのが大切と気づけた」。

桑井さんは、5月にも講座を開催予定。詳細は桑井塾のHP (<http://kume-juku.com/>)。

パパ料理研究家滝村雅晴さん(左)の指導で、オムライスを作る桑井龍三さん(左から2人目)と男子中学生たち(13日、東京都内)

この日は、パパ向け料理塾を開く料理研究家の滝村雅晴さん(左)を招いてオムライス作りも学んだ。桑井さんが家事へ熱心に取り組むのは、母親の優子さん(52)の影響がある。ひきこもりがちだった知人の息子に家事を手伝ってもらっていたら、彼の表情が和らいでいったという経験を

子どもを持つ20代男性 57%が「日常的に行う」

東京ガス都市生活研究所が2012年に、子どもを持つ男女7349人へ実施したインターネット調査では、「日常的に家事を行っている」と答えた男性は20代で57%、30代49%、40代47%。年代が低いほど割合が高い。50、60代は3割前後だった。背景には、20代(調査当時)は中学、高校で男女ともに家庭科が必修だったことがありそうだ。中学では男子は技術、女子は家庭に分かれ、高校では女子だけ家庭科が必修だったが、1993年度に中学、94年度に高校で男子も必修となった。(藤田あき)